

日本英文学会東北支部 第72回大会資料

時：2017年12月2日(土)

所：東北大学川内南キャンパス 文科系総合講義棟
(仙台市青葉区川内27-1)

日本英文学会東北支部事務局

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149
宮城教育大学 英語教育講座 竹森徹士研究室内
電話：022-214-3496／E-mail：tohoku@elsj.org

第72回大会懇親会のご案内

第72回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、11月に支部会員宛に別送する案内をご覧ください。

【日時】 2017年12月2日(土) 午後6時30分～8時30分

【場所】 東北大学川内南キャンパス 文系学部食堂(仙台市青葉区川内27-1)

日 本 英 文 学 会 東 北 支 部

2017年度 大会役員一覧

(敬称略・五十音順)

支 部 長	大河内 昌				
副 支 部 長	佐々木 和貴				
理 事	石橋 敬太郎	大西 洋一	奥野 浩子	金子 淳	
	金子 義明	川田 潤	鈴木 亨	鈴木 雅之	
	竹森 徹士	村上 東			
大会準備委員	菊池 秋夫	佐藤 恵	田島 優子	金子 淳	
	五十嵐 啓太	三上 傑			
開催校委員	大河内 昌				
事務局	竹森 徹士(事務局長)		島 越郎(事務局長補佐)		
	佐藤 亮輔(事務局員)				

日本英文学会東北支部第72回大会プログラム

時：2017年12月2日(土)

所：東北大学川内南キャンパス 文科系総合講義棟
(仙台市青葉区川内27-1)

理事会 10時30分より(文学研究科棟3階 中会議室)

開会式 12時30分より(201 法学部第2講義室)

□開会の辞

日本英文学会東北支部長

大河内

昌

研究発表

第1発表 13:00 - 13:30

第2発表 13:35 - 14:05

第3発表 14:10 - 14:40

第4発表 14:45 - 15:15

第一室(201 法学部第2講義室)

司会 岩手大学教授

境 野 直 樹

1. 『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心

弘前大学講師

土 井 雅 之

2. 未完の円環から完全な円環へ：Robert SidneyとMary Wrothの *corona*

東北学院大学大学院

青 木 愛 美

司会 東北工業大学准教授

鈴 木 淳

3. 偶然性と道徳性——トマス・ハーディの『森林地の人びと』における運命論再考

東北大学助手

原 雅 樹

第二室(211 第1小講義室)

司会 宮城学院女子大学(非)

清 水 菜 穂

1. 「耳を傾ける者」としてのJanie

—— *Their Eyes Were Watching God* (1937)に現れる成長と語りのプロセス

東北学院大学(非)

鎌 田 紀 子

2. Octavia E. Butlerの“Bloodchild”(1984)における兄弟関係

東北学院大学(非)

星 かおり

司会 秋田大学教授

村 上 東

3. *Sea of Cortez*と文化的相対性

山形大学准教授

金 子 淳

第三室(212 第2小講義室)

司会 福島大学准教授

佐 藤 元 樹

1. 英語数量詞の作用域関係とフェーズ理論

新潟大学大学院

猪 爪 成志郎

2. フェーズ理論に基づく束縛代名詞の派生的認可

東北大学大学院 堤 博 一

3. 文の左方周縁部におけるラベル付けアルゴリズム

旭川医科大学講師 戸 塚 将

第四室 (213 第3小講義室)

司会 会津大学短期大学部講師 五十嵐 啓 太

1. 英語形容詞の前位用法・後位用法について

東北大学大学院 行 場 琢 人

2. 前置詞 except を主要部とする句の統語論：削除（音韻上の弱化）に基づく分析

弘前大学大学院 鈴 木 翔 貴

司会 東北大学講師 三 上 傑

3. Late Merge の制限

東北大学大学院 齋 藤 章 吾

4. 右枝節点繰り上げの移動分析について

東北大学大学院 木 村 崇 是

SYMPOSIA (15:30 - 18:00)

第一部門 (201 法学部第2講義室)

Looking for unbeaten tracks：近現代英文学旅行記の系譜

司会・講師	八戸工業高等専門学校准教授	菊 池 秋 夫
講師	東北工業大学准教授	鈴 木 淳
講師	山形大学講師	三 枝 和 彦

第二部門 (211 第1小講義室)

大衆音楽の政治と美学

司会・講師	八戸工業大学教授	高 橋 史 朗
講師	東北工業大学教授	高 橋 哲 徳

第三部門 (212 第2小講義室)

形式と機能の両面から見た言語の姿

——語・文・談話レベルの分析から日英語の言語的特徴を考える——

司会・講師	会津大学短期大学部講師	五十嵐 啓 太
講師	東北大学講師	三 上 傑
講師	常磐大学助教	坂 本 暁 彦
講師	茨城県立医療大学嘱託助手	大久保 龍 寛

13時

研 究 発 表

第一室 (201 法学部第2講義室)

司会 岩手大学教授 境 野 直 樹

『から騒ぎ』から読み取る上演当時の国際情勢への関心

弘前大学講師 土 井 雅 之

『から騒ぎ』において圧倒的な存在感を誇るベネディックとベアトリスや、ドグベリーによって、主筋の主人公であるクローディオとヒーローの影が薄まったのは確かである。だが、主筋に加えられた変更点こそがこの作品を単なる喜劇にはさせなかったのではないだろうか。例えば、アラゴン家のお家騒動がシチリアのメッシーナで起こっていること、クローディオはフィレンツェの貴族、ベネディックはパドヴァの貴族とされ、アラゴン家当主ドン・ペドロが二人を従えていること、そして、ドン・ペドロがメッシーナの知事レオナートに歓迎されることからシチリア島にも影響力を持つと暗示されていることなどは、上演当時のシチリア島周辺の状況を踏まえた上での変更と考えられる。本論は、作品の時代背景と変更点との関係性を説明しながら、こうした変更点によって『から騒ぎ』が当時の国際情勢への関心も組み込んだ喜劇となったことを論証し、それを読み解いていく。

未完の円環から完全な円環へ：Robert Sidney と Mary Wroth の *corona*

東北学院大学大学院 青 木 愛 美

Mary Wroth (1587-1651/3) は父である Robert Sidney (1563-1621) を模倣し、*corona* という形式を用いて *Pamphilia to Amphilanthus* を執筆した。*Corona* は先行する詩の最終行が次の詩の最初の行と一致し、最終的に最後の詩の最終行が最初の詩の一行目に戻るという特殊な性質を持つ形式である。この形式が完成すると円環ができ上がり、円環の性質を利用して Wroth の *corona* は連作内で閉じた空間を作り上げている。一方で、Wroth が模倣したと考えられる Robert Sidney の *corona* は4編のソネットと1篇のソネットに満たない中途半端な詩のみで構成され、本当であれば13篇で *corona* ができあがっているはずだという記述からもわかるとおり、明らかに未完成の状態である。それが意図的であれ偶然であれ、未完成の *corona* を模倣して Mary Wroth が *corona* を完成させているということには何かしらの意図がありそうである。しかも Mary Wroth が Robert Sidney を模倣して *corona* を書いたということは、Robert Sidney の *corona* の中には Mary Wroth に *corona* を書かせることになった何かしらの要因があったのではないだろうか。Robert と Mary 父娘を繋ぐ鍵を、それぞれの *corona* を検討しながら探っていきたい。

偶然性と道徳性——トマス・ハーディの『森林地の人びと』における運命論再考

東北大学助手 原 雅 樹

トマス・ハーディの後期を代表する悲劇的な小説の一つ、『森林地の人びと』において、最も悲劇的な出来事といってよいジャイルズの借地権の喪失は、運命による骰子の一振りによって生じる。読者にとって不可解なのは、彼が、意図して選んだわけではなくまったくの偶然によってもたらされたその結果に対して、全責任を負うことをほとんど即座に受け入れることだ。だが、こうしたキャラクター描写において、ハーディは、小説という近代的なジャンルによって描かれてきたと一般に考えられている、内面をもつ自由な主体とは異なる、別の主体性のモデルを提示しようとしているのだ。それは、偶然によって生じた結果に対して責任をとることによって、事後的に成立する主体性である。悲劇や運命という言葉を用いながら、ハーディは、偶然によって支配された世界において、いかに個人の内面性なしで主体性を構築できるのか、という近代的な課題に取り組んでいるのだ。

第二室 (211 第1小講義室)

司会 宮城学院女子大学(非) 清水 菜 穂

「耳を傾ける者」としての Janie

—— *Their Eyes Were Watching God* (1937) に現れる成長と語りのプロセス

東北学院大学(非) 鎌 田 紀 子

Zola Neale Hurston による本作品のテーマは、主人公 Janie の自分探しの旅という点に集約される。しかもこの「自己実現」の旅では、コミュニティに戻った Janie が自身の経験を物語るという枠組みを使い、彼女が〈声〉すなわち主体的に自分を語る方法を獲得したプロセスが記されている。この手法に対し Henry Louis Gates Jr. は、「想定上の語り手」としての Janie を取り上げ、*Their Eyes* では自由間接話法で表現される Janie の言葉が全体を支配し、彼女の成長が語りに反映されるよう目論まれていると述べた。

しかしながら本作品は入れ子構造を持った三人称小説であり、Janie の立場は自分語りの話し手であると同時に、物語内では周囲に耳を傾ける登場人物の一人でもある。従って、本発表では「耳を傾ける者」としての Janie にまず焦点を当て、彼女の成長をどのように読み解くことが可能か検証していく。

Octavia E. Butler の “Bloodchild” (1984) における兄弟関係

東北学院大学(非) 星 かおり

本発表では Octavia E. Butler の中編小説 “Bloodchild” (1984) における男性の「出産」をめぐる兄弟関係を分析する。

この物語は、惑星 Tlic に存在する地球人用「特別保護地区」で暮らす主人公の少年 Gan が、Tlic と地球人の間で交わされている Tlic の卵を体内に移植する役割を果たすまでの葛藤を描いている。

先行研究では、Gan と T'Gatoi (Gan の庇護者である雌の Tlic) の関係が、奴隷制時代の黒人女性と白人男性奴隷主の関係を彷彿とさせることを指摘しているものがある。

しかし、Gan と同じく Tlic の出産へ関与せざるを得ない兄 Qui の存在について論じられている先行研究はほぼない。Qui はこの物語でどのような役割を担っているのかを「男性の出産」を軸に分析し、Gan の最終的な決断にどのような影響を及ぼしたのかを考察したい。

また“Bloodchild”を prototype として作られた Xenogenesis series にも可能な限り言及し、「出産」をめぐる既存の人種やジェンダー・ルール、セックスの秩序の攪乱について、分析を行いたいと考えている。

司会 秋田大学教授 村 上 東

Sea of Cortez と文化的相対性

山形大学准教授 金 子 淳

Steinbeck 研究は、1980 年代以降、アメリカ文学研究の一般的な流れに従い、小説と他の散文との関係性を見直してきていると、Schultz と Li は述べている。Shillinglaw と Benson は、Steinbeck は多くの nonfiction を 1936 年から 1966 年まで書いたが、内容は現代的で、環境問題、貧困、道徳性の衰退、戦争、人種差別、民族性 (ethnicity) を扱っているとしている。最後の著作 *American and Americans* で、それらがほぼすべて描かれているが、初期の nonfiction では、それらのテーマのさまざまな萌芽が見られる。1941 年に出版された航海記 *Sea of Cortez* は、哲学・思想、老荘思想、環境、生態学の観点から論じられてきている。しかし、それらに比べ、分量こそ少ないが、メキシコなどの文化が随所で触れられ、描写されている。これらは、後に *American and Americans* で取り上げられる ethnicity に通じるが、*Sea of Cortez* において、この観点からこれまで論じられることはほとんどなかった。グローバリズムの時代における、ethnicity や多文化共生の観点から、*Sea of Cortez* を再読していきたい。

第三室 (212 第2小講義室)

司会 福島大学准教授 佐 藤 元 樹

英語数量詞の作用域関係とフェーズ理論

新潟大学大学院 猪 爪 成志郎

作用域関係については、これまで様々な研究がされてきた。とりわけ、LF の中での操作によって説明がされているが、フェーズ理論の枠組みの中で捉える研究はあまりされてこなかったように思われる。本発表では、二つの数量詞間の作用域関係を見ながら、フェーズ理論の中で、さらに Larson (1988) の VP-shell の考え方をを用いてどのように説明できるかを考察する。特に否定数量

詞とそれ以外の数量詞の関係性から、多義的・非多義的解釈となる条件を考察する。否定数量詞同士、否定数量詞とそれ以外の数量詞との作用域関係を捉えたと、インターフェースへ転送される時差によって、非多義的解釈が生じていることが分かる。転送の時差によってその非多義的解釈が生じるので、同時に転送される場合は自由に作用域の範囲を決定（構造内での上方移動）できる。よって、二重目的語構文と与格構文、能と受動態ではそれぞれ異なる作用域関係を示す。

フェーズ理論に基づく束縛代名詞の派生的認可

東北大学大学院 堤 博 一

本論が問題とするのは代名詞束縛の可否における (1) の対比である。

- (1) a. Who_i *t_i* loves *his_i* mother?
b. *Who_i does *his* mother love *t_i*?

本論は、Chomsky (2000) 以降のフェーズ理論と統語構造の多重転送モデルを仮定し、*wh*疑問文における代名詞束縛に課せられる新たな構造的条件を提案する。具体的には、*wh*句が基底生成するフェーズの完成時に、フェーズ先端部の*wh*句コピーと転送領域内の*wh*句コピーの間に、演算子・変項構造が形成されると提案する。そして、代名詞束縛の条件として、*wh*句の演算子・変項構造が形成されるフェーズの時点で転送領域に含まれている代名詞のみが変項束縛を受けることができると提案する。代表的な先行研究としてChomsky (1976) やReinhart (1983) の提案を概観し、これらの研究が*wh*句のA位置の痕跡と代名詞の間に先行関係やc統御関係を規定したことが、極小主義の枠組みにおいて理論的諸問題を生ずることを指摘する。さらに本論の分析は先行研究の提案では予測できない弱交差効果の消失をも説明する。

文の左方周縁部におけるラベル付けアルゴリズム

旭川医科大学講師 戸 塚 将

本発表では、Chomsky (2013, 2015) のラベル付けアルゴリズムが文の左方周縁部でどのように働くかを検証する。具体的には英語の話題化構文、焦点化構文に焦点を当てる。第一に、これらの構文がラベル付けアルゴリズムによりどのように派生されるのかを考察する。第二に、話題化構文と焦点化構文の多重化がなぜ許されないかについてラベル付けの観点から考察する。第三に、話題化要素と焦点化要素が共起できる場合とできない場合についてラベル付けの観点から考察する。最後にこれらの考察から談話領域とのインターフェースである文の左方周縁部において、ラベル付けアルゴリズムにより解釈のために与えられた情報がどのような振る舞いを示すかの理論的帰結を述べる。

~~~~~



## 第四室 (213 第3小講義室)

司会 会津大学短期大学部講師 五十嵐 啓 太

### 英語形容詞の前位用法・後位用法について

東北大学大学院 行 場 琢 人

形容詞修飾には形容詞を名詞の前に置く前位用法と形容詞を名詞の後ろに置く後位用法がある。また、形容詞のなかには前位用法のみに限られるものや後位用法のみに限られるものがある。本発表では英語の形容詞修飾における前位用法と後位用法それぞれの派生方法について考え、前位用法、後位用法どちらかに限られるものについてなぜそのような制約があるのかを考える。具体的には、前位用法に限られる形容詞は名詞とともに一種の複合語を成すと考え、複合語であるために形容詞が名詞の前にしか生起することができないと主張する。後位用法に限られるものについては、元々は前置詞句を成しておりそれが歴史的に変化して形容詞になったという通時的な分析と、Chomsky (2013) などの Labeling Algorithm を採用し、ラベル決定のために形容詞が移動し後位用法になるという分析で説明されると主張する。

### 前置詞 *except* を主要部とする句の統語論：削除(音韻上の弱化)に基づく分析

弘前大学大学院 鈴 木 翔 貴

本発表の目的は、通常の前置詞句の構造では捉えられない特性を持つ前置詞 *except* を主要部とする句(以降、*except* 句)の構造に説明を与えるために、派生プロセスや *except* 句の構造に関する新しい分析を提案することにある。すなわち、[1] *except* 句内に節(小節)構造があり、[2] 主節との同一性が認められる要素は全て削除され(音韻上の弱化を受け)、情報的焦点を担う要素が *except* 句内に顕在化するという仮定に基づく分析で説明することができると主張する。また、*except* 句内の節で行われる削除は、一般的に考えられているような構成素を対象にしたものではなく、不連続な要素に対して適用される削除であると主張する。本発表での分析に従えば、*except* 句の一般的でない特性だけでなく、[PP[P *except*][DP]] の構造を持つ場合に関しても統一的に説明することができることを明らかにする。

司会 東北大学講師 三 上 傑

### Late Merge の制限

東北大学大学院 齋 藤 章 吾

本論は、遅い併合 (Late Merge 以下 LM) は、フェーズに基づいた構造構築の下、派生が収束する場合にのみ許されると主張する。LM とは、既に移動した要素に対して行う併合操作を指す。この操作は移動環境や移動要素によってふるまいが異なるが、その全てを説明する理論は未だ存在しない。本論は、Chomsky (2000) に従い、フェーズが形成されるとすぐにフェーズ主要部の補部が排出 (Spell-Out) されると仮定する。また Uriagereka (1999) 等に従い、併合は排出された

構造全体には適用できるが、その内部には適用できないと仮定する。フェーズが完成し、排出が起きた後、LMは排出された構造全体には適用できるが、排出領域の内部には適用できない。またLM適用の結果、解釈不可能素性が削除されないまま残ると派生が破綻する。本論は、上記の主張により、LMのふるまいに統一的な説明を与える。

### 右枝節点繰り上げの移動分析について

東北大学大学院 木村 崇 是

これまで、右枝節点繰り上げ(Right Node Raising: RNR)について、被共有句を全域的(Across the board: ATB)に右方移動させることによって派生する移動分析(Ross 1967, Sabbagh 2007)と、第一等位項内の被共有句を削除することによって派生する削除分析(Bošković 2004, Ha 2008)が提案されてきた。本発表では、RNRにおいて、移動によって派生される場合と削除による場合が存在すると主張し、被共有句が重名詞句の場合は、重名詞句転移(Heavy NP Shift)がATB適用されることによって右端に移動し、被共有句が軽名詞句の場合には、第一等位項に削除が適用されると提案する。

15時30分

## SYMPOSIA

## 第一部門 (201 法学部第2講義室)

## Looking for unbeaten tracks : 近現代英文学旅行記の系譜

|       |               |      |
|-------|---------------|------|
| 司会・講師 | 八戸工業高等専門学校准教授 | 菊池秋夫 |
| 講師    | 東北工業大学准教授     | 鈴木淳  |
| 講師    | 山形大学講師        | 三枝和彦 |

英文学の中で旅行記 (travel writing) は、中世におけるジョン・マンデヴィル卿 (Sir John Mandeville) のような奇想天外な東洋表象を含むものから、ルネサンス・大航海時代における探検の記録、18世紀のグランドツアーの体験記等と近現代に至るまでフィクション、ノンフィクション問わず無数の作品がある。とりわけ観光産業 (tourism industry) の発達で旅することが容易になり、作家自身の旅体験に影響を与えたであろうことは疑いえない。本シンポジウムでは、観光が産業として勃興していた19世紀半ばから、主産業の一つになった20世紀後半に亘って、旅行記研究の観点からは従来あまり論じられてこなかった3人の作家——ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins)、イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) そしてアラン・ブース (Alan Booth) ——をとりあげている。それぞれの作家における実際の旅と旅行記の関係を考察し、それぞれの旅が持っていた意義を検討することで、従来看過されてきた旅行記と観光との関わりを辿っていきたい。

語り手が本当に隠したかったものは何か  
——ウィルキー・コリンズの小説におけるセンセーショナルな「旅」——

鈴木 淳

先行研究でも言われているように、ウィルキー・コリンズ (Wilkie Collins 1824-1889) の小説は、設定がヨーロッパ大陸のときにはしばしば「ゴシック」に向かう。中編小説「狂気のマンクトン」 (“Mad Monkton” 1855) でも、狂気と言われるマンクトンと友人である語り手 (「私」) がマンクトンの一族に伝わる迷信の真偽を確かめるためにイタリアに行くが、迷信を信じない語り手自身がそこで非理性的な出来事を経験し、迷信を否定できなくなる。

だが、テキストでは、最後にマンクトンの死とともにイタリアでの出来事が隠され、その結果、イギリスにおける理性優位の秩序は保たれる。しかし、本報告では、テキストで隠されたものが非理性だけだったのかということをも「旅」というテーマを通して考え直してみたい。その際、旅を通して明らかになる、テキストでせめぎ合う二つのプロットに注目することで、語り手が本当に隠したかったものが見えてくる。

ツーリズム時代の旅行記  
——イーヴリン・ウォーのエチオピア表象——

三 枝 和 彦

イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh 1903-66) は1920年代末からおよそ10年間、旅に出かけては旅行記を書くことを繰り返した。彼が地中海周航の旅を基に、最初の旅行記『ラベル』(*Labels* 1930)を上梓したのは、観光旅行者がガイドブック片手に欧州や北米各地の名所を巡る時代だ。輸送機関の発達に加えて、ベデカーに代表される旅行ガイドブックやトマス・クック社を祖とする近代的旅行代理店の存在によって、旅は大衆が安全かつ手軽に楽しめる活動となっていた。そのように平凡化した旅と旅行者——ウォー自身も含めて——に対して、『ラベル』では冷ややかな視線を向けたウォーは、同時代の作家たちと同様に、アフリカや南米大陸へと出かけていく。

本報告では、観光旅行が一般化した時代にウォーがどのように旅と旅行記に向き合っていたかを分析し、戦間期の旅行記について再検討を加えたい。その中で、小説作品との関係性にも目を配りつつ、ウォーが複数回訪れたエチオピアの表象に注目する。

From beaten tracks to unbeaten tracks  
——アラン・ブースにおける津軽表象——

菊 池 秋 夫

アラン・ブース (Alan Booth 1946-1993) は、日本に長く住んだイギリス人であり、文筆家、英語教師として活躍した。彼は旅行好きでも知られ、*The Road to Sata* (1985) と、死後に出版された *Looking for the Lost* (1995) の2冊にまとめられている。*Looking for the Lost* の中で “Tsugaru” は、太宰治 (1909-1948) の『津軽』(1944) をガイドブックに、20世紀後半の経済大国となり観光産業が成熟した日本の青森県津軽地方を訪れた貴重な旅行記であるが、従来研究の対象とされてきたとは言いがたい。青森県を訪れた著名な外国人旅行者としてイザベラ・L・バード (Isabella L. Bird 1831-1904) も挙げられる。バードの主目的は北海道のアイヌ民族の風物であり青森は通過点に過ぎなかったものの、訪れた各地で貴重な見聞を *Unbeaten Tracks in Japan* (1880) に残している。本報告においては、太宰の『津軽』やバードのテキスト等も手掛かりにしながら、ブース自身の旅の経験と、“Tsugaru” における地域表象を検討することによって、彼にとって、また観光が日常化した時代における作家にとっての旅が持つ意味を考えてみたい。

## 第二部門 (211 第1小講義室)

### 大衆音楽の政治と美学

司会・講師 八戸工業大学教授 高橋 史朗  
 講師 東北工業大学教授 高橋 哲徳

大衆音楽を考察するとき、われわれは常に奇妙な現実と直面する。それは大衆的であろうとする、すなわち最大公約数の支持を希求するものであるがゆえに、必然的に保守的なものであるように見える。けれども、大衆音楽家が常に同時代の社会や権力と良好な関係を維持し続けてきたとは言い難い。実際、不適切な言動ゆえに社会の反感や輿論を買った、あるいは違法行為ゆえに逮捕に至った例など数限りなく、政治的志向性ゆえに政府の監視対象となった者もいる。直近では、ノーベル賞受諾演説における「剽窃」がメディアにおいて暴露された例もある。つまり、大衆音楽とは、その大衆性という点では保守的に(あるいはポピュリスト的に)機能しうるものでありながら、しばしばそこから逸脱する可能性を有する芸術形態なのであって、この奇妙な二重性こそ、大衆音楽を考察する意義の一つではないか。同時にその二重性は、「ポスト・トゥルース」という奇妙な概念が徘徊する時代においては、いっそう看過しえないものとして前景化されていると言えるだろう。本シンポジウムでは、この多元的な問題系を考察するための契機を探ってみたい。

#### 政治的表象としてのカリフォルニア

高橋 史朗

カリフォルニアはもっとも楽園に近い場所であり、競争と消費の現代の象徴でもある。ポップ・ミュージックにもその性格は色濃く反映される。青い空、白い砂浜、サーフィンといった換喩はカリフォルニアを理想の土地として形作るが、それは同時に巨大な利益を生む商品を魅力的にする素材に他ならない。カリフォルニアをこのようにポストモダンのパースペクティブから、すなわちモダニティとの関係性において見るときミュージシャンは幻想を謳いながら、それを自ら壊す必要に迫られる。それはまた、売れる商品を作りながらも、彼ら自身の資本主義的役割をイデオロギー的に対象化する試みでもある。本発表では、The Eaglesが*Hotel California*において、ディストピア的手法を用いて実現しているポストモダンのカリフォルニア表象を考察したい。それはまた、彼らが主張しようとした極めて政治的なマニフェストの検証にもなるだろう。

#### ロック・ミュージックの修辞と政治

高橋 哲徳

フレドリック・ジェイムソンが『ポストモダニズムと消費社会』において提示した論点、すなわち、ポストモダニズムは、アメリカでは1940年代末から50年代初めに現れ、対立的諸要素の混合や過去の様式の再利用などの特質を持ち、同時期に出現した消費型資本主義を反映するという論点は、ロック・ミュージックの理解とも密接に関わる。一般的にその誕生が50年代半ばに措定されるロック・ミュージックは、現在に至るまで多元的で異種混交的なジャンルであり、

ジェイムソンが考察したポストモダニズムと多くの問題を共有する。また、大衆の支持を基盤とする商品である限り、それは消費型資本主義との関係において検討されるべきものだろう。本発表では、英米のロック・ミュージックにおけるポストモダニズム的な形式と論理の諸相を概観するとともに、ジェイムソンが上のエッセイの末尾で未解決の問題として提示した、ポストモダニズムの消費型資本主義に対する抵抗の可能性も検討する。

### 第三部門 (212 第2小講義室)

## 形式と機能の両面から見た言語の姿 ——語・文・談話レベルの分析から日英語の言語的特徴を考える——

|       |              |         |
|-------|--------------|---------|
| 司会・講師 | 会津大学短期大学部講師  | 五十嵐 啓 太 |
| 講師    | 東北大学講師       | 三 上 傑   |
| 講師    | 常磐大学助教       | 坂 本 暁 彦 |
| 講師    | 茨城県立医療大学嘱託助手 | 大久保 龍 寛 |

これまで日英語の言語的特徴について盛んに研究が進められており数多くの提案がなされてきた (cf. 池上 (1981), 神尾 (1990), 廣瀬 (1997), 井出 (2006))。本シンポジウムは、各講師が形態論、統語論、意味論、語用論という異なる観点から個別言語現象を分析し、そこで得られた結果を比較、検討することで、こうした研究分野への貢献を試みるものである。例えば、五十嵐は日本語の複合語内部に代名詞が現れる理由を日本語が文脈情報を言語化する傾向にある点 (cf. 井出 (2006)) に求める。この特徴は、三上が論じる統語面での特徴と共通性が見出される。三上は日本語の主語尊敬語化における  $\phi$  素性一致現象を日本語の焦点卓越言語としての特徴 (cf. Miyagawa (2010, 2017)) から説明する。焦点が談話的概念であることを考慮すると、焦点卓越言語という特徴は、文脈情報が言語化される傾向にあるという特徴と関連するといえる。また、坂本は日英語の WH 現象について、移動操作を介した構造構築を行う英語 (cf. Cable (2010)) と語同士的一致関係に依存した構造構築を行う日本語 (cf. Harada (1972), Watanabe (2006)) という特徴付けを行う。この点は久保の分析と平行的である。久保は分散形態論の枠組みで、日英語の linking element を対象に、英語は syntax が、日本語は morphology が活発な言語であることを論証する (cf. Nishimaki (2017))。両講師の分析から英語は語ならびに文の形成を統語に、日本語は形態に頼るという傾向が見えてくる。このように、本シンポジウムでは分野横断的に議論を展開し、日英語の言語的特徴を探ることになる。

### 複合語内に現れる代名詞とその制約

五十嵐 啓 太

日英語では複合語内部への代名詞の出現が制限されると指摘されている。

- (1) a. \*English is spoken in Japan and there are lots of [it teachers].



- b. \*彼は高級な外車に乗っていて、毎晩[それ洗い]をしている。

(影山 (1999: 10))

しかし、日本語には「かれ好み」「ここ止まり」のように代名詞が複合語内に現れる事例も観察されている(影山(1993, 1999))。浅尾(2015)やAsao(2016)は豊富な事例からこうした複合語が適切になる条件を考察している。しかし、先行研究では依然として取り扱われていない事実が存在する。例えば、(2)の「それ釣り」は不自然であるが、それに比べ(3)では自然に感じられる。こうした例はこれまで指摘されていないようである。

(2) A: 鮎が食べたいな。

B: \*そのうち[それ釣り]をしたいね。

(3) B: いいね。[それ釣り]用の竿ならあるよ。

本発表は、意味・語用論の観点から複合語内部への代名詞の生起についてより一般性の高い制約を提案し、一定の条件を満たせば、日本語の場合、複合語内部に代名詞が出現し得ることを論じる。また、上述の日英語の相違から、文脈に関わる情報を記号化する傾向にある日本語とそのような傾向にない英語の違いが(cf. 井出(2006), Hirose(2013))、語形成レベルにも反映されていることを論じる。

## 焦点卓越言語としての日本語と主語尊敬語化

三 上 傑

主語尊敬語化は、Harada(1976)による先駆的な研究以来、日本語統語論研究において活発に議論されてきたテーマの一つである。とりわけ理論的には、日本語に $\phi$ 素性を介した文法的な一致が存在するかどうかという問題と関連して、主語尊敬語化を $\phi$ 素性一致現象として分析する見方が提案されてきている(cf. Toribio(1990), Ura(2000), etc.)。しかしながら、主語尊敬語化は元来、語用論的要素(言語表現(発話文)とその使用者(話し手・聞き手)の関係性等)が深くかかわる言語現象であり、英語等における一致現象とは異なり、その適用も随意的なものであるため、 $\phi$ 素性一致分析に対しては懐疑的な見方がなされてきているのも事実である。本発表の目的は、このような二面性を持つ主語尊敬語化を、Miyagawa(2010, 2017)が提唱するStrong Uniformityと素性継承システムのパラメータ化の観点から捉え直すことにある。この理論的枠組みに基づく、CからTへ焦点素性が継承される焦点卓越言語である日本語においても、CP領域内で $\phi$ 素性を介した文法的な一致現象が存在すると予測される。本発表では、主語尊敬語化がいわゆる敬体表現と同様に、焦点卓越言語における $\phi$ 素性一致現象として分析される可能性について考察する。また、林・南(1974)によれば、尊敬語化現象は日本語に特化したものではなく、韓国語やチベット語等、様々な言語で観察されるが、この現象の存在を手掛かりに、言語類型論的観点からも焦点卓越言語の統語構造のさらなる解明に迫りたい。

## 日英語 WH 現象の理論化と意味解釈の有標性について

坂 本 暁 彦

WH疑問文形成に関して、顕在的移動の発動が日英語におけるデフォルトとして設定されているという考えが統語論研究における主流となっているように思われる(cf. Watanabe(1992a, b))。この考えは、WH移動(内的併合)という一般的な仕組みが普遍文法内のオプションとしてあら

ゆる言語の間で共有され、常に自由自在に発動可能であるという見方につながる (cf. Chomsky (2008))。本発表では WH 移動の発動について、既存のものとは本質的に異なる見解を示すことになる。まず、clausal typing / scope determination (Sakamoto and Ikarashi (2014, 2015)) という、言語一般的なものと想定される一連の統語的仕組みを提案し、日英語の WH 疑問文形成について、移動操作を介した構造構築を行う英語 (cf. Cable (2010)) と語同士的一致関係に依存した構造構築を行う日本語 (cf. Harada (1972), Watanabe (2006)) という特徴付けを行う。この特徴付けのもと、日本語における WH 移動は、仮にあるとすれば、デフォルトから逸脱した形での発動となる。これによって、日本語の WH 移動が、英語とは異なり、有標的な意味解釈の産出に寄与するという帰結へと行き当たる。本発表では、この理論的な帰結の妥当性を、修辞疑問形成・不変化詞残留といった現象の観察、分析から裏づけたい。

### Linking Element から見る日英語の言語的特徴

大久保 龍 寛

これまで、日本語と英語では複合語形成において様々な違いがあることが指摘されてきた。一例として、linking element (以下、LE) が挙げられる。日本語では多種多様な形式が LE として用いられる。例えば、Mukai (2008) では属格要素の「の」が LE として用いられるとされる (例：天の川)。また、Shimada (2013) は VV 複合語の第一構成要素に見られる連用形屈折要素は LE であると指摘している (例：遊び (asob-i) 暮らす)。さらに、Itô and Mester (1986) によれば、連濁も一種の LE であることになる (例：山桜 (yama-zakura))。一方、英語では属格要素が LE として取り立てられることがある (例：women's magazine)。しかし、LE として機能している要素は当該要素のみである。このように、日本語と英語では、LE の多様性において違いが見られる。

本発表は、このような、日英語の LE に見られる相違を分散形態論の立場 (Embick and Noyer (2007)) から説明することを目的とする。具体的には、一部 Nishimaki (2017) の考え方を取り入れ、日本語では形態部門が活性化している一方、英語では統語部門が活性化しているという言語的特徴の違いがあり、その違いが両言語における LE の違いに反映されていると主張する。

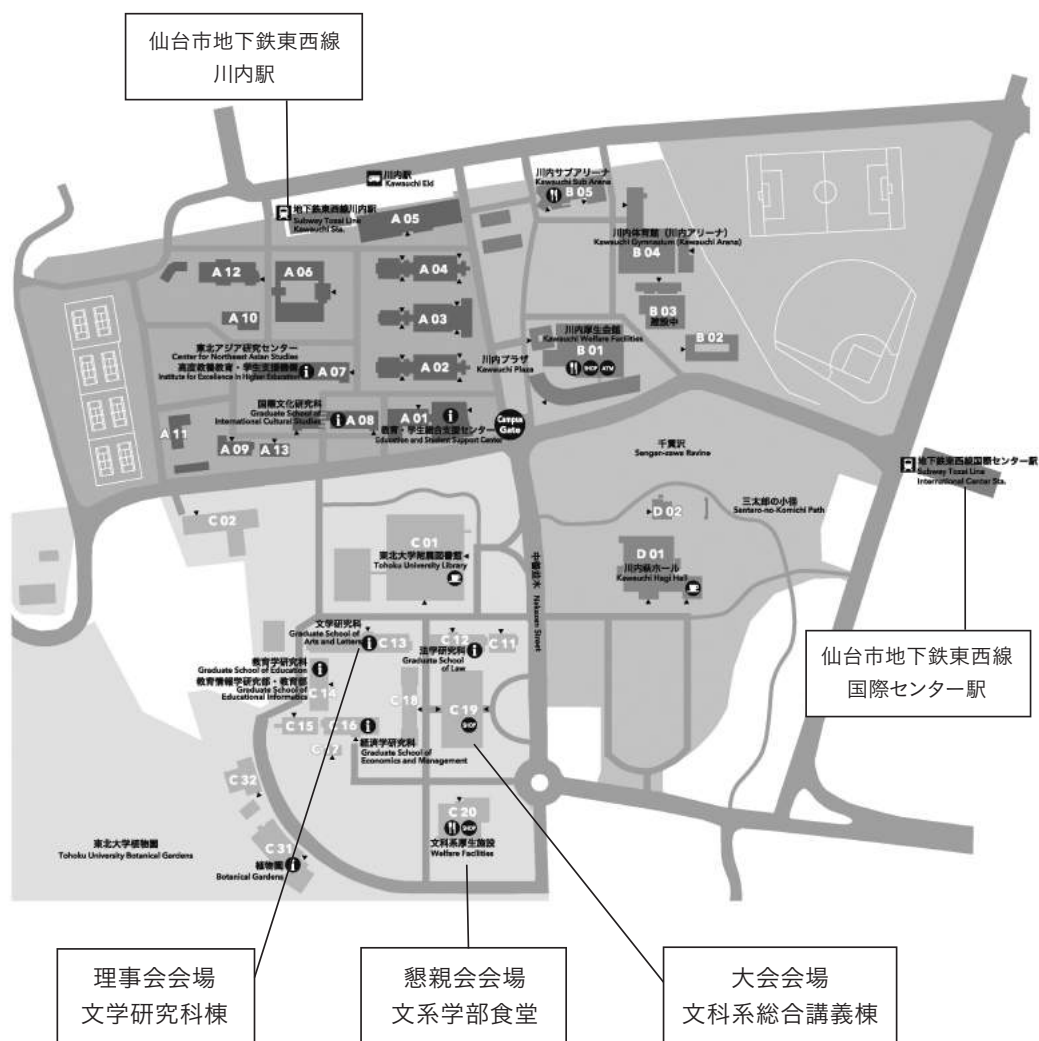


## 大会会場（東北大学 川内南キャンパス）へのアクセス

JR 仙台駅より仙台市地下鉄東西線「八木山動物公園」行き乗車、「川内駅」下車（仙台駅から約6分、200円） 徒歩約5分程度

### 周辺地図

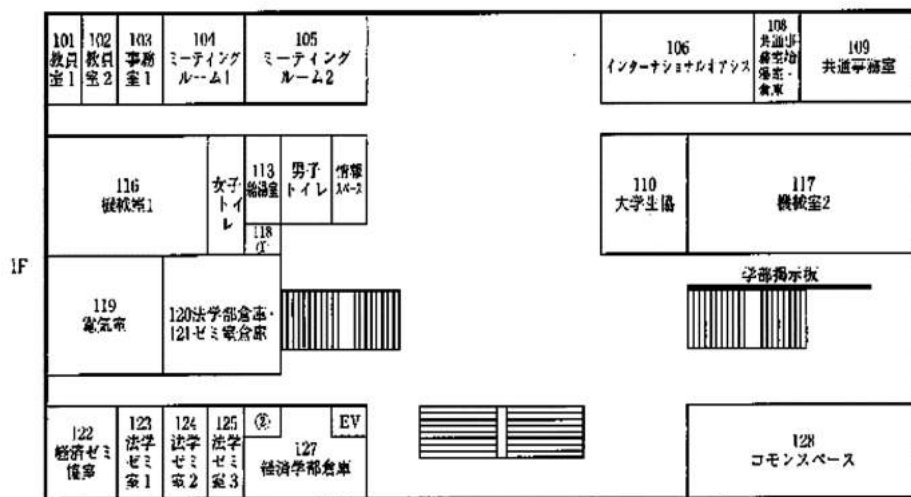
（大会会場はC19の文科系総合講義棟です）



## 施設平面図

## 文科系総合講義棟

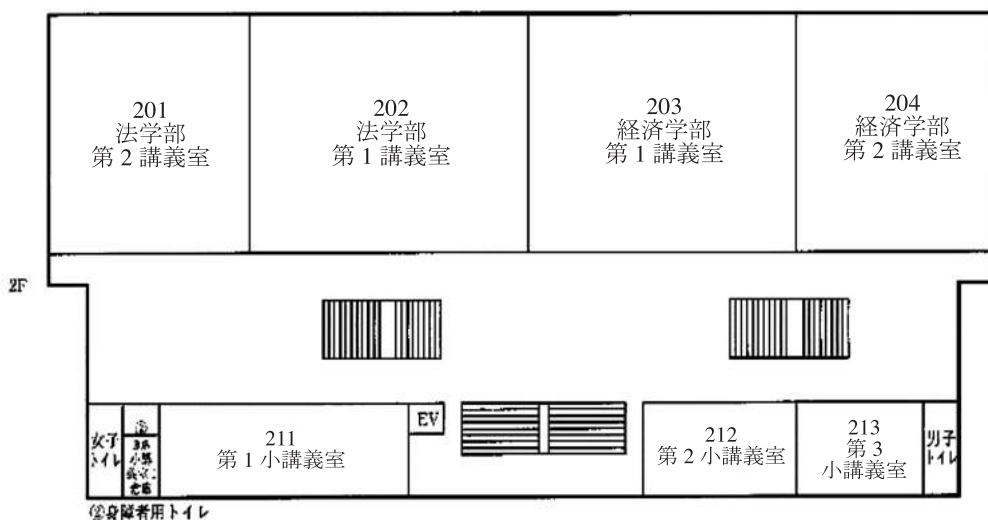
1 階



①身障者用トイレ

②126 経済学部学生相談室

2 階



③身障者用トイレ